様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年５月１４日現在

機関番号：１５４０１
研究種目：基盤研究（B）
研究期間：２００９～２０１１
課題番号：２１４０２０４２
研究課題名（和文）欧州高等教育改革が及ぼす欧州域内外の高等教育プログラムへの影響に関する研究
研究課題名（英文）Study on the Influence of European Higher Education Reform to Higher Education Programs within and outside the Europe.

研究代表者　堀田　泰司（HOTTA TAIJI）
広島大学・国際センター・准教授
研究者番号：４０３０４４５６

研究成果の概要（和文）：本研究では、欧州高等教育改革（以下，ボローニャ・プロセス）は、ドイツ、イタリアでは、それまでの個々の教員と学生の研究を中心とする大学教育を共通の教育の枠組みによる互換性・流動性の高い体制へと変化させ、アジアではアセアン諸国を中心とする域内の学生交流と共通の単位互換制度の発展を促し、アメリカでは共通の学習成果とコンピテンシー（能力）の評価基準を活用した TUNING-USA という具体的なプロジェクトへと発展したことが判明した。

研究成果の概要（英文）：In this study, it has become clear that European Higher Education Reform, so called “the Bologna Process,” has changed German and Italian higher education from individual research focused education to more compatible and mobilized higher education system by the development of common educational framework. It has also influenced the development of regional student exchanges and common credit transfer systems mainly among ASEAN nations in Asia, and also developed a TUNING-USA Project with common learning outcomes and competency based evaluation standards in the USA.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	2,400,000	720,000	3,120,000
２０１０年度	2,900,000	870,000	3,770,000
２０１１年度	2,400,000	720,000	3,120,000
年度			
年度			
総　計	7,700,000	2,310,000	10,010,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：教育社会学
キーワード：比較教育、高等教育改革、欧州、単位互換制度

１．研究開始当初の背景

欧州諸国は、欧州諸国全体の高等教育の互換性・共通性 (Compatibility), 透明性(Transparency), 流動性(Mobility)等の向上を目指し、2010年まで、ボロニア・プロセスを推進した。そうした改革が進むにつれ、期待していた成果が欧州域内で現れ始めている反面、そうした改革への抵抗、課題も浮き彫りになった。また、本研究の研究代表者は、アジア・太平洋諸国における教育交流事業であるアジア・太平洋大学交流機(University Mobility in Asia and Pacific、以下UMAP）事業の推進に協力しつつ、これまでにも欧州高等教育改革並びに国際化に関する調査のためイギリス、オランダ、スウェーデン、スペイン、ドイツ、フランス、ベ

ルギーを対象に3つの調査研究を行い、ERASMUS, ECTS, 並びにボローニャ・プロセスが近年推進しているTUNINGプロジェクトにおけるECTSとLearning Outcomesの役割等について、学会発表並びに研究論文を発表してきた。

そして2007－2008年の科学研究補助金（基盤研究Ｃ、科研番号：19530755)では、ボローニャ・プロセスを先駆的に推進したベルギー、オランダ、そして未だECTSの使用が極めて限定されているイギリスを対象にECTSの発展状況並びに高等教育への影響について調査を行い、ベルギーとオランダにおいて欧州委員会が期待している「縦の流動性」（学生が学士課程から修士課程へ進学する時の大学間の流動性）が「研究大学」と「高等専門大学」(Hogeschool) の間で起き始めていることが判明した。

２．研究の目的

本研究は、そうしたこれまでの研究をさらに発展させ、ECTS の欧州域内での影響に留まらず、ボローニャ・プロセスが世界の高等教育へ影響を及ぼし始めていることを鑑み、アジア並びに北米への影響も調査対象としボローニャ・プロセスの今後の発展と世界に対する影響を考察することを目的とした。具体的にはボローニャ・プロセスの欧州域内での影響としては、法令化によってその教育制度を大幅に改革したドイツ並びにイタリアの高等教育機関が直面している様々な障害とその原因を分析した。

欧州域外への影響としては、マレーシアを事例として、MIT と呼ばれるマレーシア・インドネシア・タイ３カ国間の学生交流プロジェクト・イニィアティブにおいて同プロジェクトがどう活用され、今後、アジア域内の教育ハブとして学生交流を促進していくのか、現状と課題を探った。また、北米では、アメリカの４州で試行的に実施されたTUNING-USA におけるボローニャ・プロセスの影響を分析し、特に高等教育機関の教育プログラムの共通性 (Compatibility)と透明性(Transparency)を実際にどれだけ向上させ、国際化や授業内容の質保証にどのような効果または、弊害をもたらしているか実証的に研究した。

３．研究の方法

上記の目的を達成するため、本件では地域ごとに担当研究者を決め、それぞれが３年間の調査期間の間に２－３回にわけ現地調査を行い、関係各機関や専門家から現地で実際に起きている事象について聞き取り調査を実施した。また、インターネット並びに現地調査より、詳細な資料を収集し分析した。現地調査は、イタリア、ドイツは、堀田、アメリカは、上別府、マレーシアは、秋庭がそれぞれ担当し、毎年１回、研究者全員が集う会合を開き、意見交換を図った。今回の調査の訪問先は、主に以下の通りである。

（１）ドイツ：カッセル大学、バノーバー大学、ハノーバー高等専門大学（FH)、ハンブルグ大学、ベルリン自由大学、フンボルト大学。

（２）イタリア：パヴィア大学高等教育制度研究センター（CIRSIS）、ミラノ・ビコッカ大学、ミラノ大学、ボローニャ大学、イタリア教育政策研究所（CERIS)、ローマ大学ラ・サピンツァ校、ローマ第３大学、ミラノ工科大学。

（３）欧州の学会並びに専門家：３年間の調査期間中は、高等教育研究者コンソーシアム（CHER）や欧州国際教育学会（EAIE）の年次大会等にも出席し、ドイツ、イタリアの大学関係者との面談を実施した。そして、欧州域内のボローニャ・プロセスの専門家であるドイツのカッセル大学のタヒラー教授やイタリアのパヴィア大学のロスタン教授、ミラノ・ビコッカ大学のモスカッティ教授、CRUI（イタリア学長会議）のスティッキ教授等にも２－３回面談し、細かい指導・助言を受けた。

（４）アメリカ：ケンタッキー大学、メリーランド大学、ニューヨーク州立大学、American Council on Education 、American Association of College and Universities、ルミナ教育財団・高等教育政策研究所。

（５）マレーシア並びにその他アジア諸国：マラヤ大学、マレーシア国立大学、UCSI大学、マレーシア質保証委員会、高等教育省、マレーシア国民大学、私立高等教育機関協会、欧州委員会マレーシア事務局、マレーシア科学大学、マレーシア国立大学、JASSO マレーシア留学情報センター、SEAMEO-RIHED （東南アジア教育大臣機構、高等教育開発地域研究所)、AUN(アセアン大学ネットワーク)。

４．研究成果

(１)各国における影響

今回の調査研究では、それぞれの地域におけるボローニャ・プロセスによる異なる影響について、具体的な状況が把握できた。以下

は、それぞれの国の傾向と特徴である。

ドイツ：ドイツにおけるボローニャ・プロセスがもたらした影響は、第一に、ドイツの伝統的な個々の学生の研究を中心とするフンボルト理念に基づく大学教育が、より体系化された教育カリキュラムやシステマティックな授業科目の枠組みが導入されたことにより、学生は、教育プログラムから授業科目を選択したり、他大学からの単位を互換したりする自由度が増した点であろう。第2に、ボローニャ・プロセスによる学士課程と修士課程の確立は、新たな雇用体制を生んだが、現段階では、伝統的な学位（DiplomやMagistar）がまだ、その価値を保っている点である。しかし、同時に、すでに国内外から修士課程への進学については、流動性が増しているもの事実である。そして、それはやがて大学間のランキングや質の格差を生む可能性を秘めている。第3に、これまでみられなかった英語による特別国際プログラムが徐々に増えていっている点も今後のドイツの高等教育の発展の方向性に影響する可能性のある現象である。

イタリア：イタリアにおける影響としては、第１に、改革前は、高等教育の試験制度が厳しく、多くの学生が留年、退学を強いられて、卒業するのに本来は“Laurea” という4年間の教育課程であるが、平均5-7年かかっていたのが、学士(3年)+修士(2年)の教育プログラムへ移行した事によって、卒業試験制度も変わり、より多くの学生が卒業できるようになった点があげられる。それによって、以前卒業できなかった学生も高等教育機関に復学する学生が増えているようだ。第２に、改革を実施する機関としない機関に２分化し、積極的に大学改革を推進する大学と自治を強く主張する教授陣が改革を遅らせている大学では、 国際的な競争力に差が生まれ始めている。第３に、フランス政府といち早く連携し積極的にジョイント・ディグリープログラムを発展させてきたことにより、今後の様々な共同教育プログラムへの対応が可能となった。

マレーシア：東南アジア域内の学生交流については、欧州の域内交流が直接影響を与えていないとの意見が関係者から挙がったが、質保証機関の設立とガイドラインの整備、コンタクトアワーから学生の学習時間総数による単位計算、シラバスに学習成果の記載の明確化など、学生交流を促進する上での基盤作りに、欧州の動きがマレーシアの高等教育に多少なりとも影響を与えていると言える。

しかし、MIT プロジェクトや上述した高等教育改革が、短期間のうちに政府主導で行われているため、大学の現場での混乱、あるいは、政府と大学関係者間でのミスコミュニケーションといった不満が、聞き取り調査から浮かび上がった。

マレーシアはマレー系優遇政策を実施し、高等教育の国際化を国家政策の柱の１つとして挙げているが、マレーシアのアイデンティティの保持という側面も、政府として非常に重視している。そのため、欧州の単位互換制度、質保証制度の整備を好事例として参考にしても、欧州的マインドセットの影響を危惧していることが聞き取り調査からわかった。教授言語についても、現在でも、私立大学は、海外の大学との提携プログラムもあるため、英語が主な教授言語であるのに対し、国立大学の学部レベルの授業のほとんどがマレー語であり、英語による学部レベルでの授業が積極的に増加しているとは言い難い。

今後、域内交流が加速化し、マレーシアが域内のハブとして発展するためには、域内の各国の教育の質や学年暦の違いだけではなく、マレーシアが抱える言語の問題、教授言語としての英語とマレー語のバランスというジレンマなど、国内独自の問題に今後も取り組み、高等教育の国際化を推進することが課題になるであろう。

アメリカ：アメリカにおけるボローニャ・プロセスの影響としては、第１にEU-USAのような学生交流事業が発展したことにより、欧州からの3年間の学士課程に所属する学部学生の受入れが拡大し、NAFSA（国際教育交流協議会）や2008年、2009年に出版されたAdelmanの報告書によって、その重要性が注目された点があげられる。第２に、2009年には、アメリカのルミナ教育財団が中心となり、インディアナ州、ミネソタ州、そしてユタ州を対象とした６つの分野の教育課程修了学生のコンピテンシー(能力)を測定する共通の評価基準やカリキュラムの開発等を共同で行ったTUNING-USAというプロジェクトの発展があげられる。また、このプロジェクトは、開始当初は３州であったが、現在は10州にまで拡大しており、アメリカ内の高等教育のニーズ（特に大学修了率の増加）と連動し、その効果を評価されていることが明らかになった。

（２）欧州域外への波及効果のまとめ

ボローニャ・プロセスの欧州地域外への影響としては、以下の傾向がみられる。

① 世界中の地域、国家政府、教育機関、教員、学生のそれぞれが興味を示したが、多くは、高等教育機関より政府主導の地域連合に発展に向けた政策的な改革案として注目されている。
② 欧州と同様の地域統合化に向けた改革の可能性については、アジア諸国の方がアメリカより強く関心を示している。
③ アジア地域では、特にASEAN諸国が欧州型の改革をモデルとして取り入れようとしている。
④ アメリカもEUと連携し、 EU-USAやTUNING-USAといったパイロット・プロジェクトとして、ECTSやcompetency と reference pointに準じた学習成果（Learning Outcomes)の活用を促進し始めている 。
⑤ ECTS は、近年アジアで発展しつつあるUCTS（UMAP単位互換制度） やACTS（アセアン単位互換制度）のような共通の単位互換スキームの基本的理念となっている。
⑥ 世界の高等教育質保証機関の国際的ネットワーク（INQAAHE）やイギリスやオーストラリアの影響もあるが、近年アジア諸国では、質保証体制の構築を目指し、認証評価団体・組織並びにQualification Frameworkといった評価制度の枠組みが急速に発展しつつある 。

（3）研究成果の国内外へのインパクト

本研究の調査は、日本だけでなく欧州やアジア諸国でも興味深いテーマであり、研究成果は、国内外の多くの専門家、教育機関、政府組織等が高等教育の発展を検討する上で意義があると考える。特にアメリカとマレーシアでの実態を現段階で把握することは、2010 年以降、ボローニア･プロセスがどのように欧州域外の高等教育へ影響していくのか考察する上で貴重な基礎データとなる。そして、それは今後の調査の目的をより明確なものにするという点でも研究成果を広く公開する必要がある。

そうした国内外へのインパクトを考慮し、本研究プロジェクトの研究成果は、2010 年並びに 2011 年には論文として発表し、さらに、2011 年度には、比較・国際教育学会（CIES）の年次大会において、研究代表者並びに研究協力者全員によるセッションを設け、各担当課題の成果発表を行った。そして国際教育行政会議（AIEA）や日本比較教育学会でも、各地域の事例研究を担当した 3 名による、ボローニャ・プロセスのドイツ、イタリア、アメリカ、マレーシアに対する影響について研究成果を発表した。

また、本研究から得られた知見は、アジアの高等教育の発展のためにすでに ASEM（アジアー欧州会議）や UMAP による国際シンポジウム等で研究代表者がアジア地域の高等教育圏の発展にむけた政策提言を発表する上でも基礎データとして使われている。

（4）今後の展望

今後の展望としては、研究代表者が関係する UMAP 事業においては、現在、参加国間の学生交流促進を目指し、共通の単位互換性度の構築が検討されているが、その基礎データとして今後も活用していく計画である。また、今年度採択された 24 年から 26 年度までの新規基盤研究（B）によるアジア 25 カ国の比較研究においても参考資料として、活用するであろう。最後に、今回の研究が終了後、前回調査したオランダ、ベルギーの事例研究も含め、研究成果をまとめ、著書として出版を真剣に計画している。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 6 件）

1. 堀田泰司,「アジアにおける質保証を伴った学生交流への期待と課題：ヨーロッパとの比較分析」,『メディア教育研究』第8巻第1号, 査読無, 招待論文（2011年）: 電子媒体 pp. S33-45

2. 上別府隆男,「ボローニャ・プロセスのアジアの高等教育へのインパクト：マレーシアを事例として」,『留学交流』第8巻第1号, 査読無、招待論文（2011年4月）: 電子媒体, pp. 1-7

3. 堀田泰司,「ボローニャ宣言にみるエラスムスの経験の意義」大学論集, 41 集, 査読有,（2010 年 3 月）, pp. 305-322.

4. Kamibeppu Takao, “Internationalisation of higher education in Japan: Recent policy developments and opportunities for greater cooperation with Europe,” Internationalisation of European Higher Education – An EUA/ACA Handbook, 査読有,（2010）A 3.2-3

〔学会発表〕（計 22 件）

(1)　国際学会

1. Hotta Taiji, “Importance of Permeable Framework in Asian Higher Education: Introduction of ACC (Asian common credit) and three new challenges” at the ASEM (Asia-Europe Meeting)’s International Asia-Europe Conference on “Enhancing Balanced Mobility” Bangkok, Thailand：March 6, 2012 (招待講演)
2. Hotta Taiji, “Comparative Study of the Bologna Process in Belgium, Netherlands, Germany and Italy: Values and Dilemmas of Transformations” at the 55th Annual Conference of the Comparative and International Education Society 2011, Montreal, Canada: May 1, 2011　(選考審査あり)
3. Kamibeppu Takao, “United States’ Responses to the Bologna Process: From Ignoring to Importing”at the 55th Annual Conference of the Comparative and International Education Society 2011, Montreal, Canada: May 1, 2011 (選考審査あり)
4. Akiba Hiroko, “Harmonization of higher education towards the “ASEANness” or “Asian” Identity” at in the 55th Annual Conference of the Comparative and International Education Society 2011, Montreal, Canada: May 1, 2011　(選考審査あり)
5. Ninomiya Akira, “Dialogue between Asia and Europe: University Mobility with the Development of Regional Credit Transfer Systems” at in the 55th Annual Conference of the Comparative and International Education Society 2011, Montreal, Canada: May 1, 2011　(選考審査あり)
6. Hotta Taiji, “Ramification of the Bologna Process (BP) in European Higher Education Institutions: Issues and Future Challenges” at 2011 AIEA Conference, San Francisco, USA: February 24, 2011　(選考審査あり)
7. Kamibeppu Takao, “Responses to Bologna Process in the United States” at 2011 AIEA Conference, San Francisco, USA: February 24, 2011　(選考審査あり)
8. Akiba Hiroko, “Harmonization of higher education towards the ASEANness or “Asian Identity” at 2011 AIEA Conference, San Francisco, USA: February 24, 2011　(選考審査あり)
9. Hotta Taiji, “Development of UCTS and its Implication; Permeable Framework for the Harmonization of Higher Education in Asia and the Pacific” The UCTS International Conference “New Dynamics of Student Mobility & UMAP Credit Transfer Scheme: Connecting the Asia-Pacific Higher Education” UMAP International Secretariat and SEAMEO-RIHED, Bangkok, Thailand, June 28, 2010(招待講演)
10. Hotta Taiji, “Importance of Student Mobility, Workload and Learning Outcomes for the Development of International Curriculum in Asia”SEAMEO-RETRAC International Forum, “Curriculum Leadership and Development in Higher Education: Best practices from Japan, Cambodia, Lao PDR, and Vietnam” SEAMEO-RETRAC、Ho Chi Ming, Vietnam: October 27, 2009 (招待講演)

(2)　国内学会

1. 堀田泰司「ボローニャ・プロセスの世界の高等教育に対する波及効果と課題：欧州、北米、アジアの事例研究を中心に」日本比較教育学会第47回大会、早稲田大学、2011年6月25 日
2. 上別府隆男「ボローニャ・プロセスと米国の高等教育改革の関連」日本比較教育学会第47回大会、早稲田大学、2011年6月25 日
3. 秋庭裕子「ボローニャ・プロセスのアジアの高等教育へのインパクト：マレーシアを事例として」日本比較教育学会第47回大会、早稲田大学、2011年6月25 日
4. 上別府隆男「米国高等教育へのボローニャ・プロセスのインパクト：ルミナ教育財団の役割に注目して」日本高等教育学会第 14 回大会、名城大学、2011 年 5 月 28 日
5. 堀田泰司「エラスムスにおける派遣事業の特徴と対日本人学生へのイメージ（ドイツからの事例報告)」第4回留学生教育学会・短期交換留学プログラム分科会, 京都大学品川オフィス、2010年10月29 日
6. 堀田泰司「エラスムス（ERASMUS）からボローニャ・プロセス（Bologna Process）へ：政策分析から見える学生交流の重

要性」日本比較教育学会第45回大会、学芸大学、2009年6月28日

〔その他〕

６．研究組織
(1)研究代表者
堀田　泰司（HOTTA TAIJI）
広島大学・国際センター・准教授
研究者番号：４０３０４４５６

(2)研究分担者
二宮　晧（NINOMIYA AKIRA）
放送大学・副学長
研究者番号：７０００００３１

上別府　隆男（KAMIBEPPU TAKAO）
東京女学館大学・国際関係学部・教授
研究者番号：５０３５０７０７

秋庭　裕子（AKIBA HIROKO）
一橋大学・商学研究科・講師
研究者番号：１０３１３８２６

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：